様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：１３６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０４７６２

研究課題名（和文）ドイツの音楽科における汎用的能力の育成に関する研究

研究課題名（英文）A study on the development of versatile abilities in German music departments

研究代表者
中島　卓郎（Nakajima, Takao）

信州大学・学術研究院教育学系・教授

研究者番号：２０２９３４９１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：ドイツの音楽科における汎用的能力の育成に関して、ドイツの音楽科教育を俯瞰したとき、以下のことが有効に働いていると言える。①「大学入学資格証書」取得システム：終身有効となるこの証書の成績は、アビトゥアの総点に高校の最後の２年間の成績が加点され導き出される。②高水準なアビトゥア試験内容：4時間の論述試験がある。音楽科も他教科と同等のレヴェルとなるよう試験内容が高い水準に保たれるシステムがある。③評価方法の基準：成績評点中の論述の割合や採点基準が細かく定められているので、それを満たさない限り総合点としての結果は見込めない。良い演奏ができても論述できないと認められないシステムとなっている。

研究成果の学術的意義や社会的意義
学習指導要領(音楽/平成20年)は，「音楽活動の最も基礎的な能力」は，「音楽を形づくっている要素を知覚し，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受すること」であるとし，音楽科における学力観を明示したが，「課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力」とは何かという問いに対しては，依然として不十分な状態にある。その問いを解決すべく本研究に取り組んだ。ドイツの音楽科においてどのようにカリキュラムが構築され，どのような実践的方法がとられ，そして生徒たちが具体的に何をできるようになるのか，すなわちどのような基礎・基本的な知識や技能，思考力・判断力・表現力を獲得するのかを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：When looking at German music education from a bird's-eye view, it can be said that the following things are working effectively on cultivating general-purpose abilities in the German music department. (1) "University Entrance Qualification Certificate" Acquisition System: The grades of this certificate, which is valid for life, are derived by adding the grades in the last two years of high school to the total score of Abitur.(2) High-level Abitur exam content: There is a 4-hour writing exam. There is a system in which the exam content is maintained at a high level so that the music department is at the same level as other subjects. (3) Criteria for evaluation method: Since the percentage of essays in grades and scoring criteria are set in detail, no result of the total score can be expected unless these criteria are met. In this system, no matter how good your musical performance is, you would not be recognized, if you can not have discussions.

研究分野：Music Pedagogy

キーワード：音楽科教育　ドイツ　海外連携

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

学習指導要領(音楽/平成 20 年)は、「音楽活動の最も基礎的な能力」は、「音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受すること」であるとし、音楽科における学力観を明示した。しかしながら、音楽科における「課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力」とは何かという問いに対しては、依然として不十分な状態にある。その要因として、我が国の学習指導要領では「表現」と「鑑賞」の 2 領域のみしか設定されておらず、活動(特に演奏)中心のカリキュラムとなっていることが考えられる。世界の主要な国々(アメリカ、イギリス、フランス、韓国、中国、台湾、シンガポール)の音楽科ナショナル・カリキュラムにおける領域は、「表現すること」「聴くこと」「理解すること」の３領域に概ね集約される。「領域」に「理解すること」に相当するものを欠いている点において、我が国は諸外国と大きく異なっている。そこで、「音楽について解明すること」に係る領域が設けられているドイツの音楽科教育に着目し、示唆を得ることとした。

２．研究の目的

本研究の目的は、ドイツの音楽科における汎用的能力の育成に関する指導内容および実践的方法を、学習者の獲得する能力を踏まえつつ明らかにするところにある。研究の対象は、現行のベルリン州の教育大綱、それに基づく授業実践(ギムナジウム第 10-12 学年)、使用されている教科書と音源 CD、アビトゥア試験内容とした。

３．研究の方法

「実践的方法(指導内容・方法、教科書、音源 CD)」と「アビトゥア試験問題」を分析し、どのようにして汎用的能力を育成しているかについて明らかにする。研究対象は、①「Rahmenlehrplan fuer die sekundarstufe」」および「Rahmenlehrplan fuer die gymnasiale Oberstufe」、②広く使用されている教科書『Drei Klang 9・10(Conelsen 社)』と『Musik um uns SekundaubereichⅡ(Schroedel 社)』、③音源 CD『Musik um uns SekundaubereichⅡ Hoerbeispiele CD1-8』である。

教育大綱に関しては、我が国になじみのない「テーマ領域Ⅲ音楽の効果・機能」「テーマ領域Ⅳ音楽の文脈・環境・外界との関連」、活動領域「音楽について思考(熟考)すること(Nachdenken über Musik)」、「思考の対象となるテーマ」、 に関しては特に詳細に調査することとする。

４．研究成果

(1)　学習内容に関する特性としては、およそ次のようなことがあげられる。学習者にとって、自己における音楽の意味をメタ認知することから、認識の対象は人（家族、友人、他者、性別）、地域、社会、国家等における音楽へと広がりを見せる。そして、「音楽の効果・機能」に関しては、生活や社会の中の音や音楽の働きに直接的に関わる具体的な事実(音環境、広告、劇場、小説、映画、宗教、政治、身体と精神、音楽療法、学術的研究等)等も扱われる。さらに、「音楽の文脈・環境・外界との関連」の領域は具体的な音楽活動ではなく、音楽が生成される際の普遍的な要素から成り立っている。これらは、とりわけ人間にとって音楽がどのような役割を果たし、人がどのように音楽を必要としてきたかという、文化理解や生涯教育を目的とした領域と捉えることができる。この視点は我が国の学習指導要領にはほぼ欠けている。

また、我が国には存在しない活動領域である「Nachdenken ueber Musik」に関するテーマと

して、「社会的文脈における音楽について思考する」「他のメディアとの結びつきにおける音楽について思考する」「形成された秩序としての音楽(作曲理論)について思考する」等の中には具体的で高度な専門性を有する内容が示されている。それらは単なる概念的な解説にとどまらず、作曲技法の分析、生活における音楽の様々な働き・音楽と社会的背景や具体的な事象との関連等を作曲家や楽曲等と関わらせつつ展開されており、示唆に富む内容である。これらの視点および内容等は我が国の学習指導要領には欠如している。

(2)　学習方法に関しては、幅広い指導内容に関連させた具体的な課題が数多く設定され、認識の対象と思考の方向性が明確に示されている。ここでは、学習者が主体となった様々な調査や探求活動が展開される。類似した課題を解決することのできる汎用的能力を獲得するためには、そのような学習方法が必要不可欠であると考えられる。そこでは、我が国のように最初に楽曲ありきではなく、学習内容に沿って結果的に様々な音や音楽が扱われることとなる。特定の曲を学ぶことにとどまらないのである。

(3)　ドイツの音楽科における汎用的能力の育成に関して、本研究の対象である教育大綱、アビトゥア試験とその取得制度、教科書、現地の教員や生徒たちへのインタビューの内容等を踏まえつつドイツの音楽科教育を俯瞰したとき、以下のことが有効に働いていると考えられる。

①「大学入学資格証書」取得システム

終身有効となるこの証書の成績表示は 1.0 点～4.0 点（１点が最高位、小数点で示される）となっている。この数値は、アビトゥア４～５科目の総点に高校の最後の２年間の成績が加点され導き出される。資格証書取得基準は高く、高校の卒業要件でもあり、不可となる生徒もいる。すなわち、生徒たちは２年間にわたって絶え間なく学び続けることを余儀なくされるのである。

② 高水準なアビトゥア試験内容

アビトゥア試験は４～５科目であり州によって差異がある。科目のうち少なくとも２～3 科目の論述試験、少なくとも１科目の口述試験がある。論述試験は１科目につきおよそ４時間、口述試験はおよそ１時間である。ベルリン州では試験問題はギムナジウムの教員が数種類作成し、州文部省へ提出する。ただし、試験内容が高水準に保たれるよう州文部省が厳しくチェックし、不適切な場合は差し戻しになるという。その水準に則して後期中等教育における学期試験が２年間にわたって行われることにより汎用的能力が獲得されていく。学習者は何をどこまでできるようになる必要があるかを明瞭に認識しているのである。

③ 教科における評価方法の基準

評価に関しては細かい規定がある。ドイツにおいては、とにかく論述できないと認められないシステムとなっている。たとえば、特定の楽器の実技がずば抜けて優れている生徒であっても、成績評点中の論述試験の割合、採点基準が細かく定められているので、それを満たさない限り総合点としての結果は見込めないのである。ある生徒によれば、授業の８割くらいはディスカッションであったという。言葉を用いて主張や説明をすることや論理を展開することは、ドイツの学力観によるものである。学習者には幅広い教養と知識に基づいた思考力が要求されるのである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 中島卓郎	４．巻 No.6
２．論文標題 音楽作品にみる音楽科の教科内容「生成の原理による音楽の教科内容」	５．発行年 2023年
３．雑誌名 学校音楽教育実践論	６．最初と最後の頁 8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中島卓郎	４．巻 No.5
２．論文標題 ドイツの音楽科における「生活や社会の中の音や音楽」に関する調査研究　―政治と音楽とのかかわりを視点として―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 学校音楽教育実践論集	６．最初と最後の頁 71,72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中島卓郎	４．巻 24
２．論文標題 汎用的能力を育成するドイツの音楽科教育	５．発行年 2020年
３．雑誌名 学校音楽教育研究　2020	６．最初と最後の頁 p.51-p.51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中島卓郎	４．巻 4
２．論文標題 ドイツの音楽科における「生活や社会の中の音や音楽」に関する調査研究 -教科書の分析を通して	５．発行年 2020年
３．雑誌名 学校音楽教育実践論集　2020	６．最初と最後の頁 p.82-p.83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 中島　卓郎
2．発表標題 音楽作品にみる音楽科の教科内容
3．学会等名 日本学校音楽教育実践学会全国大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 中島　卓郎
2．発表標題 ドイツの音楽科における「生活や社会の中の音や音楽」に関する調査研究　―政治と音楽とのかかわりを視点として―
3．学会等名 日本学校音楽教育実践学会全国大会
4．発表年 2021年

1．発表者名 中島　卓郎
2．発表標題 音楽の教科内容構成を基にしたシラバス提案
3．学会等名 日本教科内容学会
4．発表年 2020年

1．発表者名 中島卓郎
2．発表標題 ドイツの音楽科における「生活や社会の中の音や音楽」に関する調査研究 -教科書の分析を通して
3．学会等名 日本学校音楽教育実践学会第24回全国大会
4．発表年 2019年

１．発表者名 中島卓郎
２．発表標題 音楽科教科内容構成開発の理論的仮説とシラバスの提案
３．学会等名 日本教科内容学会第6回全国大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 中島卓郎（シンポジスト）
２．発表標題 シンポジウム：教科内容構成開発の理論的仮説とシラバスの提案
３．学会等名 日本教科内容学会第6回全国大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 中島卓郎
２．発表標題 「教科内容学研究　-音楽科教科内容構成科目の開発-」
３．学会等名 日本教科内容学会　第5回研究大会シンポジウム
４．発表年 2018年

１．発表者名 中島卓郎
２．発表標題 「音楽科教科内容構成開発の理論的仮説とシラバスの提案」
３．学会等名 日本教科内容学会　プロジェクト研究第6回
４．発表年 2019年

１．発表者名 中島　卓郎
２．発表標題 「音楽科の教科内容の体系」
３．学会等名 日本教科内容学会第4回全国大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 中島　卓郎
２．発表標題 「教科内容構成の創出による教科専門の授業実践」
３．学会等名 日本教科内容学会プロジェクト研究
４．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

１．著者名 中島　卓郎,他	４．発行年 2021年
２．出版社 あいり出版	５．総ページ数 272
３．書名 「第2部　第3章　音楽」「第3部　第3章」、他 『教科内容学に基づく教員養成のための教科内容構成の開発』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	ヴェルネブルク　ミヒャエル (Werneburg Michael)		

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	堀田　佳子 (Yoshiko Hotta)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関